

A—20 カップ法によるビタミンB群の微生物定量にかんする基礎的研究(XVII)

—*Saccharomyces carlsbergensis*

を検定菌とする薄層カップ手技によるビタミンB₆定量法の実用性について—

新潟県立新潟女短大 ○板垣 隆子
塚原 勲

1. 著者らは *Saccharomyces carlsbergensis* を検定菌とするカップ法によるB₆定量を試み、第20回総会では、実験手技が簡便なこと、感度および精度が高いことなどから本法の可能性を示唆した。さらにその後、本法を数種生物材料の B₆ 定量に応用したところ良好な成績が得られたので、今回は本法の実用性について述べたい。

2. 検定菌 *Saccharomyces carlsbergensis* 4228, AT CC9080, 定量培地 Atkin らの組成, B₆ 標準液として Pyridoxine を供し, さきに設定した定量条件下で数種生物材料の B₆ 定量を行ない, その B₆ 含有量, 回収率を比濁法のそれと比較検討した。さらに, 比濁法については振盪培養法と静置培養法の成績をも比較した。なお天然試料からの B₆ の抽出は酸分解法によった。

3. 本法による供試材料の B₆ 含有量は, ブタ肝臓 4.6 μ g/g, ブタ肉 5.3 μ g/g, イナダ 4.2 μ g/g, 米ヌカ 41.0 μ g/g, ピーナッツ 4.7 μ g/g, バナナ 3.2 μ g/g で比濁法で得られた測定値と近似しており, また回収率も 91~98%で, さしたるドリフトもみられず良好な成績が得られた。これは著者らがこれまで報告してきた一連の B群ビタミンのカップ定量法のうちでも有用性の高いものの一つで, B₆ の Routine Assay として推したい。なお振盪培養法と静置培養法の両比濁法の比較の結果, B₆ 含有量はほぼ一致するが, 前者に比べ後者は盲検値が高く, 回収率も一般に高値を示した。